

→飛鳥への入り口・海石榴市で、上田秋成「雨月物語」を読む

2023年1月8日(日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第576回 参加報告

その、かつては近在の庄屋であったという喜多家の屋敷が、いまも新装されて健在だ。そのエントランスガレージを備えたモダンな家を、傍目に見ながら前進する。突き当りの道が、初瀬街道で、海石榴市(つばいち)の宿場街だったらしい佇まいが街道の匂いを放っている。しばらく行くと「歴史街道」が設置した説明板と万葉歌碑があった。歌碑には巻12-3101の歌「紫は灰さすものぞ海石榴市の八十のちまたに逢える子や誰」が紹介されていて、『万葉集』には、海石榴市で行われていたという歌垣を直截的に歌った巻12-2951の「海石榴市の八十の衢(ちまた)に立ち平(なら)し結びし紐を解かまく惜しも」も収められていて、乙女心が切ない。

本日のテーマ『雨月物語』—「蛇性の淫」の物語は、この海石榴市に主人公・豊雄の姉の家があるという設定だ。豊雄が「真女子(まなご)」という女性に執着されて逃げまどい、この海石榴市の姉の家に逃げてくるというストーリーで、その姉の家がこの宿場のどこかにあった筈なのだが、「蛇性の淫」自体がまったくのフィクション。目当てすらないのが残念だった。結局、真女子は蛇身で、紀州道成寺の「清姫伝説」の如く、道成寺の僧によって退治されるというのが物語の結末だ。なお本作は、谷崎潤一郎の脚色で大正10年(1921)に、サイレント映画(監督/栗原喜三郎=トーマス・栗原)として製作・公開されたらしい。

街道筋に沿って道を進むと初瀬川に行き当たった。堤に上がり、橋の手前に大きな「文教伝来の地」の石碑。そして、河川敷には「飾り馬」のかわいいミニチュア石像が5頭だったっけ、並んでいる。「初瀬川の下流は、大和川です」という声が聞こえた。ここは、飛鳥を目指した外国の遣使たちの最後の上陸地なのだ。だから、百濟から仏教を伝えた使節団も、ここで船を降り、仏典や仏像などを飾り馬に乗せ換えて飛鳥を目指した。だから「仏教伝来の地」と領けた。難波津から大和川を遡り、安堵の館(あどのむつろみ)で小さな川船に乗り換え、ここまで来たのだろう。小野妹子の帰国に合わせてやって来た隋国の答礼使・裴世清(はい せいせい)も、この河原で倭朝廷の関係者数百人に迎えられ、警護の人々とともに推古天皇が待つ飛鳥へと、向かったことだろう。



陶板のレリーフ



海石榴市の説明版

この橋の上に立つと、そんな情景がよみがえり、めくるめく古代の風景が広がる。海石榴市と反対側の河原の土手に、本日のコース案内にある、陶板のレリーフがあった。ここで出迎えを受け、飾り馬を仕立てて飛鳥へ向かう一行の様子が焼き付けられている。

河原を少し下流へと進み、右に折れると解散する桜井駅の方角だ。俄かに現実が迫ってくるが、私はもう少し河原でまどろんでいようと思った。

<報告:岩井よおこ>